

[2007年センター試験 日本史Bを分析する]

- 今年(2007年度=平成19年度)の日本史Bの平均点は67.02点で、昨年(2006年度)の54.66点(一昨年は59.27点)から大きく易化し、世界史Bの平均点67.75点に肩を並べた。これで地歴科目でなかば常態化していた「日本史は得点できない」という受験生の悩みはほぼクワイアされたと見てよいだろう。なお地理Bは58.41点だった。日本史・世界史とは10点近いこんな得点差は入試センターでも放置したくないだろうから、来年度は地理Bも易化が予想される。
- 例年に比べて得点しやすくなったとはいえ、紛らわしい設問も特に近現代史で散見された。**文化史上の人物や事物**、そして**近接した時期の事項**といったところがチェックポイントになる。それぞれの例を挙げよう。
- **文化史上の人物や事物**の出題例

【設問30】第一次世界大戦から1920年代にかけての時期は、都市社会を舞台として現代の生活や文化の原型が姿を現した時代であった。この時期には、俸給生活者(サラリーマン)の増大などを背景として、都市の生活様式に大きな変化がはじまり、洋装や洋食が社会的に広がりを持つようになった。

下線部について述べた文として正しいものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

- ① この時期の洋食の広がりにより、米の減反政策がとられるようになった。
- ② 当時の人々に洋食として広がったものの一つに、カレーライスがある。
- ③ 当時の女性は、ほとんどが洋服姿であった。
- ④ この時期の洋装の広がりの中、軍隊でもはじめて洋服が採用された。

<分析>

明治初期の文明開化期に「牛鍋」(のちのすき焼)が誕生したことは基本知識だろう。だがこれはいわば先端文化のできごとで、牛鍋が一般家庭の食卓を日常的にかざったわけではない。これに対して大正期の第一次世界大戦ころから1920年代にかけて、洋風の文化住宅が普及したことなどを背景に、一般家庭でも洋食が調理されるようになった。「トンカツ・コロケ・ライスカレー」は当時の言ってみれば三大洋食である。「トンカツコロケ/ライスカレー」と七五調で唱えてみよう。なお、1960年代の高度経済成長期までは「カレーライス」ではなく、ふつう「ライスカレー」と呼ばれていたことも知っておこう。

選択肢①;食生活の多様化が進み、米の消費が減ったのは高度成長期のこと。1970年代からは田の面積を減らす「減反政策」が行われた。選択肢③;大正期には洋食と同様、洋装も一部で普及し始めたものの、まだ主流にはなっていない。選択肢④;たとえば戊辰戦争や西南戦争の錦絵、ビゴーやワーグマンのポンチ絵(風刺絵)を見ておくことだ。教科書や図録の図版で見える機会は必ずあるだろうから、そのときに記憶にとどめておこう。【正解は②】

- **近接した時期の事項**の出題例

【設問28】(1890年の国会開設を控えて、民権派の人々は再び活気を取り戻し、初期議会を迎えた。)下線部に関して述べた次の文Ⅰ～Ⅲについて、古いものから年代順に正しく配列したものを、下のⅠ～Ⅲのうちから一つ選べ。

- Ⅰ. 政府は詔勅により、民党の反対を抑え、予算を成立させた。
- Ⅱ. 第1回帝国議会では、自由党の一部が予算成立に協力した。

Ⅲ. 民権派の再結集に対して、政府は超然主義の立場を声明した。

① Ⅱ－Ⅰ－Ⅲ

② Ⅱ－Ⅲ－Ⅰ

③ Ⅲ－Ⅰ－Ⅱ

④ Ⅲ－Ⅱ－Ⅰ

<分析>

“第1回”帝国議会だからといって、問答無用でⅡを最初としてはいけない。Ⅲの“超然(主義)演説”が1889年2月の憲法発布の翌日、首相黒田清隆による政党政治を許容しないとの強硬姿勢の表明であることは必須事項。次がⅡの1890～91年、初の衆議院議員総選挙を経て召集された第1議会。議席の多数を占めた立憲自由党など民党勢力は「政費節減・民力休養」を唱えて藩閥政府と対立したが、第1次山県有朋内閣は民党の一部を抱き込んで軍拡予算を成立させた。最後に来るのがⅠで、1892～93年の第4議会。第2次伊藤博文内閣による“建艦詔書(和衷協同詔書)”を発しての海軍拡張予算の議会通過である。わずか3年ほどの期間内の順序関係を問う設問。近現代史ではこのように近接した事項の識別が求められる。なお、初期議会は第1議会(1890～91年)から第7議会(日清戦争開戦を受けて1894年10月に一週間だけ開かれた)まで、それぞれ特徴があるからきっちり整理しておくこと。【正解は④】

(佐治)